

今日も雨

川端真央

1

浮かれた夕方の新宿で、凜子は人を待っていた。行き交う人の無数の足音や街に溢れる雑音が、強い西日となって小さな喫茶の窓一点を照りつけている。凜子は中からぼんやりとその窓を見つめた後、手元の熱いミルクティにゆっくりと唇をつけた。甘い熱が唇の先から脳に伝わってくる。すぐに、薄い皮膚がこの陶器から離れると言わんばかりに痺れだす。急いで、小さく啜る。少し味わう。そして飲み込む。数秒。たった数秒が恐ろしい程に長い。

相沢智也という男は、まさにこの喧騒に佇むしらけた純喫茶の様であった。無造作に伸びた髪、細長い手足、首元にかけて急激に曲がった背中。無愛想で、誰しもが待ちわびたキャンパスライフの始まりには絶対に近寄りたくない類の男である。凜子だって、映画制作サークルの新生歓迎会で同じ席に座らなければ、おそらく一生自分から話しかける事は無かったであろう。年齢不詳。学年不詳。ただ淡々とカメラを回し続ける男。それがみんなの知る『相沢先輩』だった。

店内に小さく流れるクラシックは、何かのCDのはずなのにちっとも曲の終わりが来ない。凜子は一度真剣にこの曲が何なのか考えてみようと思いい、意識を天井近くのスピーカーに集中させた。どこかで聴いたことのあるような、それでいて何の取り柄もないメロディラインが続く。その時、店中の壁を優しく震わせて、入口の鈴が鳴った。重たい扉から、無愛想な男が顔を出し、迷うことなく凜子の方へと歩いてくるのが見える。凜子は視線を再びミルクティに移し、上品なカップの縁をなんとなく指でなぞって見た。BGMの事は完全に忘れてしまっている。

「久しぶり。」

凜子の視線に入り込むようにして、相沢が首を曲げて挨拶をした。

「お久しぶりです。」

凜子はきちんと目を合わせて同じように挨拶をし、また視線をミルクティの方に戻した。そして今度は一口啜った。

「何飲んでるの？」

向かいに座った相沢が、上着を脱ぎながら聞いてくる。奥の方で、マスターが水を用意しているのが見える。

「ミルクティです。いつもの。」

いつもの、という最後の一言に相沢が少しだけ反応した様に見えた。いつものミルクティなのだ。一人でここへ来た時も、いつもこれを飲んでる。アウターを脱いだ時に上がつてしまったセーターの袖を、鬱陶しそうに戻す。相沢の仕草を見て凜子は季節がもう冬である事を再認識した。

マスターがやってきて、相沢の前に水を置いた。

「ブレンドで。」

首だけマスターの方に向けて言う姿は、一年経ても全く変わっていない。去年の冬、突如仲間達に就職が決まった事を告げた時も、相沢は同じ様な話し方だった。

「最近どう？」

「何がですか？」

「いや、サークル。順調？」

「まあ。カメラマンがいなくて、森さんが一人で頑張ってます。」

「森かあ。でもあいつももう卒業だもんね。」

「はい。」

「凜子は？」

「私はみんなの手伝いでいっぱい。」

「脚本は？書いてないの？」

「はい。あんまり。」

「そっか。」

黙ってしまった相沢を目の上で見ながら、凜子はまたミルクティを啜った。舌の先に甘さがこびりつくのを感じる。凜子は相沢の表情が気になってしまい、もう一口ミルクティを啜るついでに視線を少し上にあげた。すると、予想外にも相沢は凜子を真っ直ぐに見ていた。焦って目を逸らそうにも、両手でしっかりと掴んだカップが邪魔をして顔を動かす場所がない。タイミング悪く、口内に甘い液体が流れ込む。そのまま数秒間、いや一秒にも満たなかったかもしれないが、二人は凜子のカップ越しに無言で見つめ合った。

お待たせしました、とマスターがお盆からブレンドコーヒーを離れた。今度はそれがマスターの手によって相沢の目の前に置かれるのを二人して眺めた。艶やかな湯気が相沢の顔に突き刺さっては消えていく。凜子は、次の会話を考え始めた。きっと互いに持

ち合わせているだろう切り札を、どこで使うのが最適なのか分からなくなっていたのだ。「お仕事は、どうですか？」

熱いコーヒーによく口をつけようとしたタイミングで後輩から質問が来たので、相沢は慌ててカップを机に戻した。

「うん、まあまあだよ。映像作ったりは出来ないけど、カメラには触れてられるからね。」相沢は大手のカメラ会社に就職した。凜子とは六歳差だった。

「仕事はそれなりにやってるけど。やっぱり学生が懐かしいよ。」

大学に入ってから、親戚や周囲のうちに、大学生は特別だから、好きな事して楽しんだ方がいい、と散々言われる様になった。特に具体性のないそのアドバイスが凜子は嫌いだった。でも今、目の前の座っている男が考えているのは、やはり同じ事なのだろう。時の流れを前に、凜子は無力さと惨めさで、なぜだか突然泣きたくなった。人はどうしたって、大人にならなければいけないのだ。手元のカップの内側には、ミルクティの跡がこびりついている。

「弟君は、その後どんな感じ？」

ぷつりぷつりと切れては始まっていく様な会話に、申し訳ない気持ちと、焦燥感と、そして少しの苛立ちも感じる。

「はい、お陰様で希望の大学で、楽しそうに過ごしてます。私とは大違い。」

「はは。そっか、良かったよ。久しぶりに会いたいなあ。」

「最近、家庭教師始めたみたいですよ。」

「まじで？そりゃ感慨深い。」

「はい。相沢さんに散々世話焼かせてたくせに。」

「それも含めて、可愛かったからいいんだよ。」

ほんと、君達兄妹は可愛かったからな、と、思い返す様に一人で笑っている。初めの頃はこんな風に笑う人だとは思っていなかった。生まれつきの仏頂面と、拗らせた人見知りや彼を包んでしまっていただけだった。そのイメージを変えようと、悪あがきしないところもまた相沢らしかったのだが。

「女手一つで、こんなに良い子達を育てたお母さんもすごい。」

「うちは冷えた家庭だったから、羨ましいよ。」

次々と褒め言葉を並べる相沢は、もうすつかり感傷モードに入ってしまったっている様だった。以前から、話せば明るい男だったが、こんなにもスラスラと喋っていたか。懐古に専念する相沢をよそに、凜子はこの相沢智也という男を改めて考えてみた。脚本家の夢、弟の受験、片親で苦労した過去。凜子が相沢の気を引く為に落として来た持ち物達を、相沢はきちんと拾って今も持ち続けている。ちゃんと凜子に返す為に。そういう優しさが、凜子をいつも怖気付かせていたのだ。

「相沢さん、浸りすぎです。」

「ああ。ごめん。」

「褒めてくれるのは嬉しいけど、可愛いつていうのはちょっと。」

「どうして？」

「私もう二十一です。」

「二十一は世間的には可愛いに入るんだよ。」

「世間的には、もう大人なんです。」

「はは。まあそれもそうだね。」

「はい。」

凜子の不機嫌そうな表情を見て、少し真剣になった相沢は、その間を埋める様にカップに口をつけた。奥の厨房から、冷蔵庫の唸る様な音が響く。互いの本音に踏み込めない男女の、居心地の悪い沈黙が続く。身体の中では、伝えたい事や聞きたい事が渦巻いているのに、喉に全身の力は集中しているかの様に、声に出せない。代わりに出るのは、『一年ぶりに再会した後輩』としての、ご挨拶ばかりだ。

静かな店内に、どこかで聞いたことのある様なクラシックが流れる。相沢を待っている時からずつと変わっていないのかと思うほど、同じ曲調である。外は少し暗くなり始めていた。行き交う人の数は絶えず、甲高い摩擦音を鳴らす電車は、尚も人をこの新宿へと運んでくる。帰る人、やってくる人、誰一人として知るはずがないのに、全て用意されたエキストラの様に見えてしまう。この疎外感、この惨めさ。目に映る全てが凜子を圧迫する。

「相沢さん、今晚雨降るみたいですよ。」

「そうなの？傘持って来てないよ。」

「私も。」

「嫌だなあ。大降りなのかな。」

「かなり降るって予報では。」

嫌だなあ、濡れたら禿げちゃうんでしょう、とぼやく相沢に同調しながら凜子は自分の鞆を引き寄せた。

「そうだ、私そろそろ行かなきゃ。夕飯の担当なんで」

「そうか。じゃあ駅まで送るよ。」

「いや、相沢さんまだコーヒー残ってるじゃないですか。それにここ久しぶりでしょう？」

「うん、まあ…」

「折角だし、マスターとも少し話していったらどうですか？明日には大阪、戻っちゃうんだし。」

「…そうだね。ありがとう、そうするよ。」

「はい。」

「じゃあ、元気だね。」

「はい、元気です。」

またね、と言ってくれなかったのが寂しかった。気弱な人だ。きっと凜子の心を覗く様な事はいつまで経っても出来ないのだろう。

扉を開けて、冷たい風が頬の熱を破っていくのを感じる。肩をすくめて、人で溢れた新宿をすり抜けていく。

椅子に残した、落とし物に気付いて。

END